

# 北朝における郡望の性格（下）

矢野主税

## 目次

- 第二節 金石文にみえる出身地
- 第三節 金石文にみる北朝の婚姻関係
- 結語

## 第二節 金石文にみえる出身地

では、右のような傾向は、金石文ではどうであつたろうか。前述のように、竹田氏によれば、「唐代の碑誌類では郡望の使用が圧倒的である」といわれているが、そのような傾向は、恐らくは前代の北朝においても同様であつたろうと推測されないでもない。しかし、正史の表現に種々の形式があつたことをみれば、金石文の場合もそう単純であつたともいい切れない。果して実際にはどうであつたか。

いま、北朝金石文における出身地表現の傾向を通観するのに便利と思われる二つの資料を出して、それらを比較してみることとする。

第一資料は、金石萃編(27)北魏(一)の條にみえる、「孝文皇帝弔殷比干墓文」の碑陰にみえる官職名、出身地をつけた氏名表である。元祐五年の呉處厚「碑陰記」その他の按文によれば、この碑は太和十八年十一月高祖(孝文帝)が鄴に幸して比干の墓を過った時建てられたものであるという。従って碑陰に記された氏名は、当時高祖に従った高官達であったことになる。

第一列

- (1) 使持節驃騎大將軍都督司豫荊郢洛東荆六州諸軍事開府司州牧咸陽王□河南郡元□
- (2) 侍中司徒公都督中外諸軍事太子太師駙馬長樂郡開國公臣長樂郡馮誕
- (3) 使持節司空公太子太傅長樂公臣河南郡丘目陵亮
- (4) 特進太子太保廣陵王臣河南郡元羽
- (5) 侍中始平王臣河南郡元勰
- (6) 兼尚書右僕射吏部尚書任城王臣河南郡元澄
- (7) 散騎常侍祭酒光祿勳卿高陽伯臣河南郡元徵
- (8) 太子右詹事姑臧伯臣隴西郡李韶
- (9) 散騎常侍北海王臣河南郡元詳
- (10) 散騎常侍領司宗中大夫臣河南郡元景
- (11) 散騎常侍臣河南郡元纂
- (12) 右衛將軍臣河南郡元翰
- (13) 光祿大夫錄太僕少卿臣高陽郡李堅

- (14) 中常侍中尹高都子臣上党郡秦松
- (15) 龍驤將軍臣河南郡大野愨
- (16) 司衛監臣河南郡元蚘
- (17) 司衛監臣河南郡万忸于勁
- (18) 員外散騎常侍光祿勳少卿黃平子臣河南郡丘目陵純
- (19) 兼司衛監少府少卿臣魏郡□□
- (20) 給事黃門侍郎臣太原郭祚
- (21) 給事黃門侍郎領著作郎臣清河郡崔光
- (22) 典命中大夫太子中庶子臣廣平郡游肇
- (23) 羽林中郎將臣河南郡侯莫陳益
- (24) 員外散騎常侍帶呂興給事中臣河南郡丘目陵惠
- (25) 太子率更令襄陽伯臣河南郡元尉
- (26) 給事中臣河南郡乙旃恬
- (27) 給事中臣河南郡乙旃免
- (28) 給事中臣河南郡郁久閭麟

以下、第二列、第三列に合計五十四名の名があげられているが、煩雑であるので省略することとする。

この碑については、前述のように太和十八年十一月後魏高祖が比干の墓をよぎった時に建てたものとされているが、実はこの記録が太和十八年に書かれたものか否かについては、そう簡単には断定でき難いように思われる。なるほど金石萃

編に引く金石録には、

「碑陰盡紀侍從羣臣官爵姓名。按後魏書官氏志。邱穆陵氏後改穆氏。今此碑自侍中邱目陵亮以下。同姓者凡三人。字皆作目。而元和姓纂所書與此碑正同。又碑自穆崇至亮皆姓邱目陵氏。姓纂亦云後改爲穆。而史但云姓穆者。皆有闕誤。」とみえて、太和十八年のこの碑陰が記述が正しいので、史書の方に誤りがあるとして、この記述と正史との矛盾にふれてゐる。しかし、両者の矛盾はともそれだけではないように思われる。

魏書（7下）高祖紀によると、太和十九年の條に、

「六月……丙辰。詔遷洛之民。死葬河南。不得還北。於是代人南遷者。悉爲河南洛陽人。」

とあり、それが実行されたであろうことは、この碑陰の記述の中の鮮卑系に属すると思われる人々は、皆「河南郡某」として記されていることで明らかである。

ところが、この「河南洛陽人」と称することは、少くとも太和十九年の詔の後でなければならず、それ以前である筈がない。

更に、もう一点納得でき難いのは、同じ高祖紀に、

「（太和）二十年春正月丁卯詔改姓爲元氏」。

とみえることである。即ち、元氏というのは太和二十年春正月以降に始めて現われるべきであるのに、この碑陰で既に元氏と称しているのは何故であろうか。即ち、この碑が太和十八年に建てられたとすれば、(1)何故に「河南某」という表現がなされているのであろうか、更に、(2)何故に「河南元氏」という記述がなされているのか、という二つの疑問がわく。

この点については既に金石萃編の按文にも、

「高祖紀太和二十年春王正月丁卯詔改爲元氏。据此碑則十八年己著爲元矣。抑或撰文在前。書碑陰在二十年之後耶。」

といっている。即ち、元氏に改めたのが大和二十年であることからみれば、恐らく撰文は十八年であったとしても、碑陰の記述は二十年以後のことであろう、と解している。そういうふうには、撰文と碑陰の記述とが時期的に別だとすれば、「河南郡某」とか「元氏」がみられるのは不思議ではなくなる。

この場合考えられるのは、撰文が何時行われたかは別として、兎に角、刻まれたのは太和二十年以後であったことは動かさまい。さて、この弔文と碑陰の侍從羣臣の姓名とは、両者相俟って始めて皇帝の弔比干墓文としての体をなすと考えられるから、この両者は同時に刻まれたと見るべきであろう。少くとも、両者が別々に撰述されたり、刻まれたりするのとは、極めて不自然である。しかもこの碑が太和十八年に建てられたとすると、前述のような矛盾がおこるはずである。ということは、高祖が比干の墓を祭ったのは太和十八年であったとしても、その弔文が撰せられ、侍從羣官名が記され、その上で刻まれたのは、恐らく太和二十年以降であったのではなかったのか、と考えられよう。

なるほど、太和十八年の條（魏書高祖紀）には、

「丁丑車駕幸鄴。甲申經比干之墓。傷其忠而獲戾。親為弔文。樹碑而刊之。」

と記してはいる。しかし、甲申の日に比干の墓をよぎったのは事実であるにしても、同日に親しく弔文をつくり、碑を樹てることはできないのであるから、この弔文の撰文と碑に羣官名を刻む作業はその後の仕事であったに相違ない。例えば、北史（42）劉芳伝に、

「孝文遷洛。路由朝歌。見殷比干墓。愴然悼懷。為文以弔之。芳為注解表上之。」

とみえるように、平城宮から洛陽城への途次比干の墓をよぎったのであるから、弔文はその感懷のままに、甲申の夜、或は洛陽城についた直後に作られた可能性はある。しかし、「芳為注解表上之」とあるから、孝文帝自らの弔文もその後何等かの修正が行われた可能性もあるし、碑陰の羣臣姓名に至っては、勿論調査の上、羣臣の官爵の高下に従って書かれた

ものに相違ない。

そのような過程を経てこの碑がたてられたとすれば、それが太和二十年以降であっても少しも不思議はない。少くともこの碑が二十年正月以前に建てられたとすることは納得でき難い点が多い。しかし、太和十八年からそれほど後になって建てられたとも思えないから、恐らくは太和二十年頃には建てられたのかも知れない。

さて、この碑陰について注目すべき点について考えてみよう。

第一に、河南郡出身が極めて多いことである。全員合計八十二名(第二列・第三列の人名は省略した)の中、三十九名を占める。ほぼ半数である。その中・元氏に属するものは十三名である。その十三名中十一名が第一列に記され、第二列の右翼(第二列元氏は省略した)にあげられたものが二名である。これは宗室に属する人々であるから、当然といえば当然であろう。

第二に、北方系の河南郡出身以外は、長樂郡馮氏、隴西郡李氏、太原郡郭氏、清河郡崔氏、廣平郡游氏、京兆韋氏、河東郡柳氏、趙郡李氏など、中国の有力門閥の郡望を冠する家々が多かった。

しかし実際には、それらの人々のうち、その郡望とは全く関係のない生活を送っている人々もあったのではないかと思われる。例えば、前述した清河郡崔氏にみるが如く、魏書(67)崔光伝には、

「崔光……東清河郈人也。」

とみえるが、北齊書(42)崔劼伝には、

「崔劼……本清河人。曾祖曠南度河。居青州之東。時宋氏於河南立冀州。置郡縣。即為東清河人。南縣分易。更為南平原貝丘人也。世為三齊大族。祖靈延宋長廣太守、父光魏太保。」

という。これによれば、この第一列(21)の崔光一門に関する限り、元來崔氏の出身地であった「清河郡」からは、光の祖曠の時から離れて、「東清河郈人」となっていたわけで、従って、光や劼にとっては清河は関係のない地であった筈で

あり、それ故にこそ、訃は「本清河人」であつたわけである。崔光については第一列に「清河郡崔光」とはしてあつても、現実には東清河郡の人でこそあつたのである。

或は又、第二列には李預の名がみえる。そこには、「長兼典命下大夫齊王郡友臣趙郡李預」とみえる。これだけでは、李預は郡望趙郡を称していたことになるが、実際には彼は何処に居住していたのであろうか。いま預の祖父先について、魏書<sup>(33)</sup>の李先伝をみるに、

「李先……中山盧奴人也……（慕容 垂滅。慕容 永徙於中山。皇始初。先於井陘歸順。太祖問先曰。卿何國人。先曰。臣本趙郡平棘人。太祖曰。朕聞、中山土廣民殷。信爾以不。先曰。臣少官長安。仍事長子。後乃還鄉。觀望民士。実自殷廣。又問先曰。朕聞長子中有李先者。卿其是乎。」

とある。この内容は次のようなことであらう。「李先は中山盧奴の人である。慕容永に従つて中山に徙つて、その地の人となつた。皇始の初めに魏朝に帰順した。太祖武帝は先にたずねた、あなたは何処の出身だ。先が对えているに、私は元來は趙郡の李氏に属しますが、今は中山の人間です。すると太祖は、中山郡は土地は広く人民は多いときいているがどうかときいた。先が申上げるには、私は若年の時から長安で官につき、ついで長子縣の役人となつたが、その後故郷中山に帰り、人々の様子を見ると、誠に人多く地広しと思ひました。又太祖が先にたずねるには、わたしは前に長子縣に李先なる者があるときいた、君がその人なのか、」と。

若しこの解釈で大過なしとすれば、李先にとつては趙郡というのは昔むかしの話であつて、現実に、彼の故郷は中山盧奴の地であつた。ところが、その先の孫である李預について、この碑陰では「趙郡李預」と記されている。この場合も、李先やその子孫李預は「本趙郡人」ではあつたとしても、趙郡の地は今や彼等には全く關係のない土地にすぎなかつたであらう。

こうみてくると、この碑陰にみる限り、鮮卑系の人々については、すべて河南人として現本貫を示し、漢族系の人々については郡望（旧望）を記す書法で、この書法は現実の本貫（新望）如何にかかわらず、郡望に執着する書法であるといえる。

これに対して第二の資料は、金石萃編（33）北齊（一）「西門豹祠堂碑」の碑陰にみえる人名である。

この碑文は按文に引く「中州金石記」によれば、北齊の清河王岳によって建てられたものであり、碑文は天保五年魏収の撰するところといっている。その碑陰には清河王隸属の官僚達の氏名が刻ざまれている。以下そこにみえる人々のうち、出身郡を明記しているものについてのみあげることとする。それは第一資料との比較の便宜のためである。

# 第一截

- (1) 散騎常侍趙郡王州都勃海高□
- (2) 驃騎大將軍開府儀同三司尚書右僕射彭城縣開国公州都魏郡元韶□
- (3) 平東將軍別駕從事史魏郡穆子□
- (4) 前將軍治中從事史魏郡鮮于□□
- (5) 主簿魏郡高婆藪
- (6) 主簿廣宗潘僧度 字子昱
- (7) 西曹書佐魏郡元稚英 字季彦
- (8) 西曹書佐魏郡李天綱 字天綱
- (9) 記室從事魏郡叔孫子慎 字僧護
- (10) 記室從事清河崔□□ 字公孺



- (11) 戸曹從事魏郡穆遺□ 字子傲
- (12) 戸曹從事清河張□威 字
- (13) 金曹從事魏郡尉□□ 字文
- (14) 金曹從事頓丘郡李□ 字□明
- (15) 租曹從事魏郡陸元茂 字道盛
- (16) 租曹從事廣平游子璠 字士瑜
- (17) 兵曹從事陽平路君元 字公初
- (18) 法曹從事魏郡于德隆 字道□
- (19) 法曹從事陽平宋幼良 字真
- (20) 部郡從事魏郡柳暎 僧陰
- (21) 部郡從事魏郡薛廓 子元
- (22) 部郡從事魏郡□□渾瑛 長璠
- (23) 部郡從事廣□□序 元伯
- (24) 部郡從事清河□義 緊陁
- (25) 部郡從事林慮皇甫□ 桃科
- (26) 部郡從事林慮辛□ 景宣
- (27) 部郡從事清河傅□□武
- (29) 部郡從事魏郡□景□□昇

北朝における郡望の性格(下)

(30) 部郡從事魏郡□子□ 德卿

(31) □從事魏□□□□□

## 第二截以下省略

さて、この碑が前述のように天保五年(A.D. 554)に建てられたものとすれば、「孝文皇帝弔殷比干墓文」が建てられたかと思われる太和二十年(A.D. 496)から数えて半世紀を経ていることが、まず注目される。又、「弔比干墓文」は孝文帝の侍従官僚を記したものであるから、皆高官であったのに対し、こちらは清河王岳の支配する司州(北齊書13、清河王岳伝参照)の官僚達であるから、身分的には高官から属僚までを含んでいる。

このような両者を比べて先ず注目されるのは、こちらの碑陰の人々の出身地は、魏郡出身が極めて多いということである。出身郡を明記する五十七名(第二截以下の人名は省略した)のうち、魏郡出身は二十三名で、ほぼ五分の二を占める多数である。これは「弔比干墓文」において河南郡出身者の多い有様とよく似ている。

更にその内容についてみるに、北齊書(28)元韶伝によるに、

「歴位太尉、侍中録尚書司州牧。進太傅。齊天保元年降爵為縣公。」

とみえる。これは北齊朝の成立と共に魏王室に属する元韶の爵が彭城王から縣公に降されたことをいっている。これは正しく碑陰にみる(2)「彭城縣開國公州都魏郡元韶□」にあたると思われる。ところが魏宗室に属する元氏は魏代においてはすべて「河南洛陽人」と称していたことは「弔比干墓文」にみえる元氏の例で明らかである。即ち、「河南人」ではないかと思われるのに、元韶ここでは「魏郡人」とされている。

次に、(3)「魏郡穆子□」についてみるに、北史(20)穆崇伝に、穆崇の子孫の一人として、

「子容、小好學。無所不覽。求天下書。逢即寫錄。所得萬餘卷。魏末為通直散騎常侍。聘梁。齊受禪。卒於司農卿。」

とあるところの穆子容のことであろう。ところがこの穆氏は、魏書(27)穆崇伝に「代人也」とみえるから、孝文帝の時から「河南人」と称したことは誤りない。それは「弔比干墓文」にみえる「河南郡丘目陵亮」が穆崇の子孫であることによつて明らかである(魏書27穆亮伝)。それが、ここでは魏郡出身として記されている。

或は又、(18)「魏郡于德隆」とみえる于德隆は、恐らく代人とされる于栗磾(魏書31于栗磾伝)の一族であろう。栗磾の子孫の一人である于謹が「河南洛陽人」(周書15于謹伝)といわれていることからみれば、德隆も元来は南遷したすべての代人と同様に「河南人」であつたかと思われるのに、ここでは「魏郡」出身とされている。

更に、(21)「魏郡薛廓」についてみるに、恐らく北斉書(26)の薛琰と同族であろう。ところで薛琰伝によると、「河南人。其先代人。本姓叱干氏。父彪子、魏徐州刺史」とみえていて、元来代人であつたこの一族は、後に河南人となつていた筈であるのに、薛廓は魏郡出身となつてゐる。

このようにみてくると、「弔比干墓文」で河南洛陽人といわれた鮮卑系の人達は、この「西門豹祠堂碑」では魏郡人とされていたとみて、ほぼ間違いないように思われる。

勿論、逆は必ずしも真ならずで、「祠堂碑」で魏出身とされている人々が、魏代において必ず河南洛陽人といわれているか否かを断定することは困難であろう。しかし、少くとも北方系の人で魏朝で代人から河南人となつた人は、この碑にみる限りでは「魏郡人」と称してゐたことは間違ひなく、その限りにおいて、逆も亦真であつたであろう。

では、魏代において河南人となつてゐた人々が、北斉時代となつて何故に魏郡人と称されるようになったのであろうか。それはいうまでもなく、洛陽の地から魏郡鄴に移住し、その地に本貫をつけるようになったからであろう。即ち、東魏が鄴を都としたことにより、北斉武帝に従つて鄴都に移つた魏臣達にとつては、北斉の建国と共に「魏郡鄴人」となつたのは当然の成行であつたろう。それは、魏孝文帝に従つて洛陽に移住した代人達が、悉く河南洛陽人となり、周書(4)明

帝記に、周室と共に長安に移住した人々が、

「自魏氏南徙。皆称河南之民。今周室既都関中。宜改称京兆人。」

という詔に従つて京兆人と称したのと同様であつたらう。

例えば、代人于栗磾の子孫の謹は河南洛陽人を称したこと前述の如くであるが、その子義について、隋書(39)の本伝には、

「于義字慈恭。河南雒陽人。父謹從魏武帝入関。仕周官至太師。因家京兆。」

とみえる。即ち、謹は京兆に移住し、ここに本貫をつけたと思われるが、義の代はなお河南人を称したかのように思われる。しかし、前述したところでも明らかなように、このような場合は、伝頭の地名は旧望にすぎず、現在の望に本貫は京兆であるとするべきであつた。そのことは、謹の曾孫、義の孫である于志寧について、旧唐書(78)の本伝には、「雍州高陵人」、新唐書(104)の本伝には「京兆高陵人」としていることによつて確かめられる(全唐文<sup>206</sup>、兗州都督于知微碑参照)。

このように、代人達はその従つた政權の移住について、その都の地の人となつたと思われる。このことこそ、「弔比干墓文」にみえる河南洛陽の人が、魏郡出身と變つた理由であらう。

次に、この碑陰で注目される第二の特徴は、ここに出てくる人々は、大部分は司州に属するこの地方の有力家の出身であつたことであらう。というのは、ここにみえる郡は、殆どこの司州に属するからである。もし司州に属しない郡をあげるとすれば、(1)「州都勃海高□」の場合のみであらう。但し、鄴都を含む司州である以上、司州牧清河王の属僚であつたとしても、その政治的・社会的地位は必ずしも低いとは限らなかつたことは注目すべきである(後述参照)。

勿論、前述のように、魏郡出身の人々には多くの北方系の人々があつたわけである。しかし、そういう人々を除いたとしても、魏郡出身の漢民族も多かつたし、司州各郡に属する有力漢民族も多かつたに違いない。例えば、(17)「陽平路君元」

は北斉書(46)に「陽平人」とみえる路去病と同族であったのではなからうか。というのは、魏書(88)路邕伝によると、  
「陽平清潤人。世宗時。積功勞。除齊州東魏郡太守。」

とみえる如く、この路氏一族というのは、魏朝以来陽平郡の地方有力家であったに違いないと思われるからである。

又、「(14)頓丘郡李□」は頓丘の李氏として繁栄していた李平一門(魏書65李平伝)に属するのではあるまいか。というのは李平の子孫の一部は東魏の末年まで孝静帝に仕えていたことは明らかであるからである(全上)。例えば、北斉書(35)李構伝には、「黎陽人也。祖平、魏尚書僕射」とみえていて、平の子孫である構は北斉に仕えていたわけである。但し、李構は黎陽人となっているが、これは現本貫であって、郡望(旧望)は「頓丘」であったことは後に述べる如くである。こうみえてくると、この頓丘郡李□は李平の一門に属するもので、頓丘李氏は司州の有力勢門であったとみられる。

或は又、「(10)廣平游子璠」についてみると、魏書(54)游雅伝をみると、

「廣平任人也。……世祖時與渤海高允等俱知名。」

とあり、周書(55)游明根伝には、

「廣平任人也。……子肇……尋遷太子中庶子。(肇孫)安居……武帝中司空墨曹參軍。齊受禪。爵例降。」

とみえる。この游肇は「弔比干墓文」の條に「(2)典命中大夫太子中庶子臣廣平郡游肇」とみえるものであることは間違いない。これらによれば、廣平郡游氏は北魏以来この地に根拠地をもっていた一族であり、游子璠もその一員であったとみてもよからう(元和姓纂(6)廣平游氏の條参照)。

このように、路氏・李氏・游氏の例から考えて、他の人々も大体相似た状態にあったものではなからうか。いま、魏郡以外の郡に属する人数を計えてみると(ここでは、省略した出身郡明らかな人々をも計えておく)、

(1)清河郡四名、(2)頓丘郡四名、(3)廣平郡四名、(4)北廣平郡五名、(6)汲郡一名、(7)林慮郡五名、黎陽郡四名、(9)濮陽郡二

名、(10)東郡二名、(11)廣宗郡一名

のようにみえる。勿論これらの外に出身部のはっきりしない人々が数多くいるのであるから、軽々に断定できないようにも思われるが、ここにもるように司州属僚は殆ど司州内の郡の出身であつたといえよう。

次に、この碑陰の記事について考えられる第三の点は、ここにもえる人々はすべてこの地の出身——この地に本貫をつけている——と思われるが、果して彼等は夫々の郡望を称しているのであらうか、それとも郡望をすてて、この地の新しい望を称しているのであらうかということである。

さて前述の如く、李構は李平の孫であつた。いま、この一門についてみるに、

「李平字晏定、頓丘人也。彭城王勰之長子。」(魏書65) (李平伝)

とみえ、又、魏書(13)文成元皇后李氏伝には、

「梁国蒙縣人。每頓丘王峻之妹也。……父方叔恒言。此女当大貴。」

とみえる。ところが、魏書(66)李崇伝によると、

「李崇字継長、文成元皇后第二兄誕之子。」

とみえ、李平と李崇は共に文成之皇后の兄達の子で、従兄弟の間柄であつた(北史43李崇伝参照)。この李平の孫に構がいたわけである。これらによつて考えれば、この一門は李構の場合については、元来梁国の李氏であり、ついで頓丘の李氏となり、更に黎陽の人となつた、ということになる。即ち、李構にとって黎陽は現在の望であり、頓丘は旧望であり、梁国は旧々望であつたわけである。

ところがこの李構について、北齊書(35)裴讞之伝に、

「讞之雖年少。不妄交遊。唯與隴西辛術、趙郡李繪、頓丘李構、清河崔瞻為忘年之友。」

とみえていて、世間的にはなお頓丘の李構として遇せられていたようである。すると、この「(14)頓丘郡李□」の場合も、形式的に郡望頓丘を称していたとても、現実には李構の場合と同様に、他に本貫をうつしていた可能性がないわけではあるまい。

さて、前の本貫(郡望)を去って新しい本貫を設け、その新望を以て出自を称したかと思われる李構の如き例は、この碑陰の記事においては可なり一般的ではなかったであろうか。

いま、(20)「林慮辛□」について考えてみよう。辛氏というのは、魏書(45)辛紹先伝、同書(77)辛雄伝にみる如く、元来は「隴西狄道人」であった。ところが元和姓纂(3)辛氏の條によれば、北斉には、辛術・辛愨等の高級官僚があったとみえ、特に辛術は北史(50)辛雄伝によれば雄と同族とみえ、その伝(北斉書38)によれば北斉の吏部尚書に至っている。或は又、魏書(45)辛紹先伝によれば、紹先の子孫子馥について、

「出為清河太守。武定八年卒於郡。」

とみえていることからみて、子馥の子孫が北斉に仕えたことは間違いないといえよう。

このように、「隴西狄道」の郡望を称しながら、実際には北斉に仕え、北斉官僚として栄えた人々が多かった筈で、それらの人々が司州の各郡に生活の根拠地をもち、その地を新しい望として、例えば「林慮辛某」と称したとしても不思議ではあるまい。

或は又、(19)「陽平宋幼良」についてみるに、宋氏一族は元来西河にあったが、それから廣平・敦煌・弘農その他の各地に分散したようである(元和姓纂(8)宋氏の條)。いま魏書(77)宋飜伝をみるに、

「廣平列人也。吏部尚書弁族弟。」

とみえ、同書(63)宋弁伝にも、

「廣平列人也。祖愔與從叔宣、博陵崔建俱知名。」

とみえており、彼等の子孫は夫々有力官僚として魏朝に活躍している。北斉においては東郡太守宋良なる者があつたと元和姓纂（8）に記されている。すると、廣平宋氏に属する人々が東魏から北斉へと仕えた者があつたに相違なく、「陽平宋子良」もその一族の一人であつたのではなからうか。

或は又、前述した「陽平路君元」の場合も、路邕（魏書88）以来陽平郡に本貫をかまえていた一族に属するのであらう。元和姓纂（8）路氏の條によれば、平陽を望とする一族があつて最も繁榮したとし、この中に北斉に仕えた路君儒なる人物がいたと記している。この君儒と君元はその輩行からみて同族であることは間違ひなく、これらの路氏一族が現住所であり、現本貫のある陽平の路氏を称していたといえるであらう。

以上によってみるに、「西門豹祠堂碑」の碑陰に刻まれた人々は、清河王岳の支配下にあつた人々であつたが、その中には、北方系有力家に属する人々が数多く見えると共に、司州に土着する有力官僚家の出身と思われる多数の属僚がいた。それらの属僚達はあまり昔の郡望にこだわることなく、現実に定着した土地、新しく本貫をつけた土地を、今の望として称している人々が可なりあつたように思われる。

さて、上述の二つの碑陰の記事の特徴についてみるに、既にふれた如く、「弔殷比干墓文」の場合は、皇帝に侍従した中央官僚の場合であり、「西門豹祠堂碑」の場合は、司州牧清河王の属僚達という、いわば主として地方官僚という立場における場合である。

このような夫々の特徴は、それらの碑陰にみえる人々の出自についての記載にも可なりの影響を及ぼしていたのではなからうか。すなわち、前者に属する人々は実際には別の土地にすみ、その土地に本貫をつけていても、依然として旧来の望即ち郡望を称していたが、後者に属する人々については、実際に居住し定着している土地を以て出身地としているよう



である。このことは、中央政界に於ては郡望にとられる態度からなかなか抜け出せなかったが、地方政界においては、たとえその家が有力官僚家に属していたとしても、現実的な居住地である本貫地を重視していたということであろう。

しかし、同じく中央官僚といっても、北方系の人々の場合には河南にあれば河南人、魏郡にあれば魏郡人、京兆にあれば京兆人と称したようである。この人々は漢民族と異つて、別に固執すべき故郷、特殊な感情をもつ出身地もなかったわけであるから、常に新しく定着した土地を称したものと思われる。

このように考えてくると、漢族の中央官僚達にとっては、なお郡望はそれぞれの社会的地位を示す伝統的な標識として重要であつたかも知れぬが（魏書（附）宋弁伝、宮崎市定「九品官人法の研究」）、地方官僚社会ではその定着した土地における実力こそ重視されたので、遠い祖先の出自という如きは問題とならなかつたのではあるまいか。ということは、地方におちつ

いた人々は、たとえ漢民族門閥としての伝統があつたとしても、その伝統的な背景とは全くはなれて、土着的な勢力を形成し、その土地の人間として生活していたことを伺わせる。そのことを証するためにこれらの地方に土着した官僚家の婚姻関係係を調査してみよう。

### 第三節 金石文にみる北朝の婚姻関係

北朝の婚姻関係については、既に宮川尚志氏が、正史を利用して、北魏を中心とする貴族階層について述べられている（六朝史研究—政治社会篇—中の「北朝における貴族制度」参照）。それによれば、北朝の有力貴族では、王室との婚姻、有力家相互の婚姻などが行われたとして、婚姻関係表を作製し、それについて、「表中の大部分の豪族は華北一流の階層に位し、王室とも容易に通婚したことを知りうる。」と説明されている。

では、北朝関係の金石文ではどうであつたろうか。金石文にみえる資料は、必ずしも正史に伝記をもつ、政治的・社会的



寇臻、「合厝于洛城西十五里大墓所」

寇治、「窆於洛京西大墓次」

寇演、「窆于洛城西北芒、附于大兆次寇憑、

「葬洛陽都西廿里北芒上」

（各人の墓誌銘）

さて、この寇氏は、例えば寇侃墓誌に「上谷昌平人也。……漢故大將軍恂之遺英、侍中榮十二世之胤。」とみえるように、後漢時代の上谷の著姓であった寇恂（後漢書列伝6）の子孫といわれ、代々有力な官僚を出した家柄であった。上述の墓誌には、すべてその出自は「上谷昌平人」と記しているが、現在は洛陽の地に生活し、ここを彼等の生活の根拠地（故郷）としていたことは、彼等の墓地が洛陽城西の「大墓」とよばれる一カ所に集められていることから察せられる。彼等は最早現実には、上谷の人ではなく、洛陽の人であったわけである。

さらに、「芒洛冢墓遺文四編補遺」によれば、寇嶠妻墓誌がみえる。墓誌によるとこの一家は、東西魏の分裂の際、嶠の叔父開府西安公儁（周書37寇儁伝）に従って入関したが、夫人は大統十三年長安に卒した。ところが夫嶠は既に河洛の地で卒していたので、夫人の柩は洛陽に帰り、「合祔於邵州使君（嶠）之塋」したとあるから、嶠と夫人は共に洛陽にある寇氏の大墓に葬られたものであろう。

この一家の系図は、次の如くである。

嶠——士綽

+

侃之——祖洛——河東薛氏  
雍州刺史濟北太守（後夫人）

ここで、この一門の婚姻関係をみるに、明らかであるのは、天水楊氏（二度）、安定席氏、譙郡夏侯氏、河内司馬氏、馮

北朝における郡望の性格（下）

翊魚氏、京兆韋氏、河東薛氏などである。このうち、多くの郡は比較的洛陽に近いとしても、天水郡、安定郡などは洛陽からは極めて遠隔の地である。ところがこれらの家々と寇氏との婚姻が成立するためには、一種の地縁関係が前提として存在していると考えねばならぬ（拙稿「隋唐時代の上層郷邑社会」〔第一經〕とすると、寇氏が既に何代も以前から洛陽を故郷としていたことを考えるならばこれら各氏との婚姻の成立は、それら各氏も亦寇氏同様に、洛陽に生活の場をもち、ここを故郷としていたと考えてよいであろう。即ち、各地から洛陽に集まって、そこを生活の場とし、或はこの地を故郷とするに至った家々が、相互に社交グループを形成し、何等かの縁によって婚姻が結ばれるに至ったことを示している。特に、讚の妻が天水楊氏であり、その孫憑の妻も天水楊氏である如き場合をみれば、たとえこの両楊の間に血縁的に近い関係がなかったとしても、これらに共に天水楊氏に属するという同族意識がなかったわけであるまいから、寇氏と天水楊とは長期間に亘る親縁関係があったであろうと考えられよう。

次に、趙郡李氏を例にとって考えよう。

# ○趙郡平棘李氏について

八瓊室金石補正（22）に「齊故李功曹墓誌」がみえる。李功曹は、「君諱琮字仲璵、趙国平棘人也。」とみえるように、趙郡李氏に属する琮のことである。その略系図を示せば次頁の如くである。

さて、この一家も代々の官僚家である。李琮は北斉末年近くに卒しているが、その死んだ時のことについて墓誌銘には、「武平二年五月丁未朔廿二日戊辰、卒於孝德里舍。時年五十有五。武平五年正月壬戌朔十二日癸酉、祔於先君之墓次。」とみえている。孝德里というのは、恐らくは實際生活の場であった鄴城の地であろうが、墓地については「先君之墓次」とみえるから、祖先代々の墓地に帰葬したのであろう。ところで李琮の墓誌銘の按文に、

琮功曹

鉅鹿魏氏

仲超—鉅

趙客

彦遐——博雅

趙  
奴

+

太原王茂

+

博陵崔君

廣平遐德

 $+$ 

鉅鹿魏義

永陽鄭金

+女

渤海十

北朝における郡望の性格（下）

「右李琮墓銘、在元氏縣南張村義學内。」

とみえるところによれば、墓地というのは祖先伝来の趙郡元氏縣の墓地であつたということになる。従つて、この一家の生活は鄴郡にあり、死んだら趙郡元氏縣に帰葬するという形がとられていたのであらう。それは、都鄴とその故郷趙郡とが近接していたことによると思われる。

この一家の婚姻關係についてみるに、地理的に近接した地域の婚姻であることが注目される。しかし、このことはこれらの婚姻が地理的關係からのみ成立したことを示すとみるのは早計にすぎる。というのは、これらの人々がそれぞれの出身地で生活していたとすれば、近くても百キロメートル、遠い土地は四百キロメートルも離れた土地であるから、相互に出会う機會は殆どなかつた筈である。然るに事實は、趙郡出身の李氏がこれら各地の出身の家々と婚姻を結んでいるということは、これらの人々が一つの地縁的共同体を形成し、社交グループをつくり、互に婚姻關係を結びうる状態にやつたことを意味するわけである。即ち、これらの家に属する人々は、京師鄴城に集まつて官僚生活をし、その状態に應じて婚姻が成立したと見るべきであらう。

しかもこのうち、鉅鹿魏氏との婚姻が三回に及び博陵崔氏との婚姻が二回に及んでいることは、李琮一家とこの両氏との間には恐らく一種の特別な親縁關係が成立していたものではないかと思われるのは、前述の寇氏と天水楊氏の場合と同様であらう。

即ち、北齊時代においても京師に集まつた官僚家が社交グループを形成し、それを縁として婚姻關係が成立したと思われる。勿論、李氏の場合、生活の場は京師にあつても、墓地は出身地に祖先伝来のものがあつたのであるから、いわば故郷の分裂という形をとっていたわけである。(例えば山左家墓遺文「崔頤墓誌」金、石萃編(30)「高湛墓誌銘」など。)しかし、多くの場合、生活も墓地も京師で営まれ、完全に京師の人になり切つていたのではあるまいか。

そのような例をあげれば、鄴下冢墓遺文の「梁子彦墓誌」がある。この墓誌によれば、

「公諱子彦字子彦、安定天水人也。……以武平二年歲次辛卯二月乙卯朔廿五日癸卯、薨於東明里宅。春秋五十八。……粵其年四月戊寅朔廿日丁酉葬于野馬崗北、去王城廿里。」

という。梁子彦は安定の出身であるが、現在は恐らく鄴城内の東明里に宅を設けて生活の場としていたのであろう。墓地は王城即ち鄴都を去ること廿里の地にあったのである。これによれば、梁子彦は今や全く郡望とは無関係の鄴城中心の生活をし、墓を設け、そこを本貫としていたに違いない。

更に、鄴下冢墓遺文「徐之方墓誌」によると、

「王諱之才、字士茂、東莞姑幕人。……武平三年歲次壬辰六月辛未朔四日甲戌遘疾、薨于清風里亭。……其年十一月乙亥朔廿二日庚申、葬于鄴城西北一里。」

と書いて、恐らく鄴城内に生活し、その西北郊外一里の所に墓地を設けていたという。ところが、前述の如く北斉書(33) 徐之才伝によると、

「丹陽人也。父雄事南齊。位蘭陵太守。……之才……(入魏)……武定四年自散騎常侍轉秘書監。……楊愔以其南土之人。不堪典秘書。」

とみえて、丹陽の人即ち、全く南方の人と目されていたのである。けれども之才は北帰した後は、昔の郡望東莞の地とは無関係の鄴都清風里に居住し、墓地もまた近くに営んでいたものであろう。

更に、鄴下冢墓遺文「鄭子尚墓誌」によると、

「君諱子尚……滎陽開封人也。……以武平五年五月廿一日、喪於伐惡城。即以十二月廿三日。□葬於鄴城西南卅五里。」とある。伐惡城というのはどこにあるのか明らかではないが、この元來滎陽を郡望とする鄭子尚一家は、鄴城西南に墓地

を設けている以上、故郷をはなれて京師を居住地としていたと推定して誤りあるまい。

以上によってみると、居住地は京師であっても、墓地は祖先伝来の地をつづけている、所謂故郷の分裂の状態にある家と、居住地も墓地も京師附近であり、郡望を称していてもそれは単に形式的なもので、実際は京師に本貫をつけて、その地の人となった人々があったわけである。但し、分裂した故郷の状態にあった家は、居住した京師と墓地の所在地とが近接していたという事情があったのではなからうか。鄭氏の場合のように、京師の近くに郡望の地があったとしても、既に故郷をすてて京師に故郷をうつしていたと思われる人々もあったのである。恐らくは、郡望の地をすてて故郷をはなれ、京師にうつり、そこに墳墓を設け、その地を本貫としていたのが、一般的傾向であったであろう。

以上、寇氏・李氏以下の人々にみたよう、北朝では、各地から洛陽或は鄴等の京師に集まった家々は、それぞれ社交グループを形成しながら婚姻関係を結んでいたようで、結局は京師に生活し、京師附近に墓地を設け、そこを故郷とするに至ったものであり、その故にこそ、全国各地の郡望をもつ人々の間の婚姻が可能であったわけである。

## 結 語

以上の考察によれば、正史にみえるところでは、北方鮮卑系の人々のみならず、漢民族門閥社会に属する家々においても、郡望否定の傾向は強かったようである。南朝正史の場合と比べると、北朝の方がより明確、より断定的にそのような傾向が現われている。それは恐らくは、北朝社会が北方系の人々中心の政治社会で、従って、漢民族社会の門閥的特権は最早大した意味をもたず、実力主義の社会であったことによるものであろうか。

この傾向は金石文においても同様であった。ただ、北魏時代の漢民族中央官僚の場合は、なお郡望にとられる態度がみられるのであるが、北齊時代となると、郡望を表面上称することがなかったわけではないにしても、郡望よりも寧ろ



現実に定着し、本貫をつけているところを称することが、可なり一般的であったようである。

このことは、婚姻関係をみることによって証明できよう。即ち、婚姻関係にみる限り、現実の生活の場、墳墓の地、新しい本貫こそ大切にされ、同じ土地に住む人達是一種の地縁共同体を形成していたことが明らかである。それは全く、中央、地方の官僚を問わなかったと考えてよい。

かくて北朝の人々もまた、南朝の人々と同様に、郡望という門閥社会の社会的絆から解放されつつあったといえるようである。